1900年パリ万博における音楽

——公式コンサートを中心に——

井上　さつき
Inoue-Arai, Satsuki

0．序

1900年4月14日、共和国大統領ルベ Loubet の臨席のもと、フランス国歌〈ラ・マルセイエーズ〉と世界的なオペラ作曲家として活躍していたマスネの〈荘厳行進曲〉が高らかに演奏されて第5回パリ万国博覧会の開会式が行われた。マスネの〈荘厳行進曲〉は万博の開会式のために特別に作曲されたものだった。パリ万博はこれまで回を追うごとに規模が大きくなってきたが、今回はこれまでにも増して大規模に開かれ、入場者は5000万人を越えた。当時のフランスの人口が3500万人であったことを考えれば驚異的な数字である。パリの万博は他のどの都市で開かれた万博よりもたくさんの外国人をひきよせ、また、自国民をひきよせたが、特に1889年と1900年の2回の万博はお祭り的な要素が強くなっていた。見物客に近代科学やテクノロジーの驚異を教えこむことから、しだいに客を楽しませる方へと力点が移ったのだった。

会場では、通常の展示の他に、数多くの式典や祭典が催された。開会式や褒章授与式、閉会式など一般的な式典に加えて、パリ祭、園芸祭、収穫祭、セーヌの河祭などである。また、照明を駆使した夜の祭典が多いのも特徴だった。

今回、万博の主な会場となったのは、シャン・ド・マルスとコンコルド広場、ヴァンセンヌの森で、その広さは総計223万7720平方メートル。前回1889年万博の2倍以上の面積が使われた。さまざまな面での肥大化…これが1900年万博の特徴のひとつだった。その広大な敷地の中で雑然と広がる博覧会は、それまでのような秩序だった配置も焦点となるポイントもなかった。組織委員長ピカール Picard は1900年万博を「1世紀の総決算」だと形容していたが、そこに展示されるものはあまりに雑多で見物客を困惑させるばかりだった。

1900年博では、1855年第1回パリ万博時に建設されて以来、万博会場として使用されてきた産業宮（パレ・ド・ランデュストリー）が壊され、新たにグラン・パレとプチ・パレが建設された。グラン・パレでは、フランス美術の1世紀(1800-1889)展が、プチ・パレでは、フランス美術の10年間(1889-1900)展が大がかりに催された。

万博会場にはさまざまな音楽が満ち溢れていた。諸外国のパビリオンで演奏された異国の音楽、産業博の楽器展示部門に設けられた小ホールで行なわれた数々のミニ・コンサート、昔のパリを再現した「小パリ」内で演奏していたコロンヌ管弦楽団やサン＝ジェルヴェの聖歌隊、また、外国からは合唱団体をはじめ、グスタフ・マーラー指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が訪れ、万博会場で演奏した。ロイ・フラー劇場で演じた川上音二郎一座の「女優」貞奴が大人気を博したのもこの1900年パリ万博である[i]。しかし今回は、フランスがオフィシャル・イベントとして企画した音楽プログラムに話を絞って稿を進めたい。

1．音楽「展示」の定型

1900年万博は1855年以降、67年、78年、89年と、ほぼ規則正しい間隔で開催されたパリ万博の5回目に当たり、半世紀にわたって開かれた一連のパリ万博をしめくくるものだった。この後、パリで万博が開かれたのは1937年だけである。

1855年パリ万博以来、この地で開かれる万博は「産業万博と芸術万博がドッキングして開かれる」ことが特徴のひとつで、芸術博覧会が大々的に開催されてきた。とはいえ、音楽の位置は最初から定まったものではなかった。1855年パリ万博では、褒賞授与・閉会式に音楽が多用され、さらに続いて記念コンサートが開かれたという点で世界初の1851年ロンドン万博とは異なっていたとはいえ、この時点では、音楽を「展示」するという意識は見られなかった。しかし、1867年第2回パリ万博以降、音楽は芸術の一分野として認知され、その「展示」が公的に行なわれるようになった[ii]。

最初の2回のパリ万博が第二帝政下で行なわれたのに対し、1878年、89年、1900年のパリ万博は第三共和制下で開催されたが、公式の音楽プログラム、つまり、万博の組織委員会が公的に企画したイベントの骨格が変わることはなかった。そのプログラムの基本となったのは、1867年パリ万博の際に考案されたプランであり、回によって変動があるものの、大別すると以下のイベントが基本となった。

A. 作曲コンクール

　　カンタータ

讃歌、行進曲

B. 各種コンサート

オーケストラ

室内楽

オルガン

C. アマチュア音楽団体のコンクールとフェスティヴァル

オルフェオン（アマチュア合唱団）

アマチュア吹奏楽団・金管合奏

D. 軍楽隊のコンクールとフェスティヴァル

E. 民俗音楽（ミュジック・ピトレスク）のコンクールとフェスティヴァル

F. 音楽に関する会議・講演

1900年パリ万博において、音楽は「作曲と演奏の２つの観点から展示される」と規定され、音楽の公式なプログラムが組まれた[iii]。前回1889年パリ万博の反省から、今回は作曲コンクールや民俗音楽のコンクール・フェスティヴァルは行なわれなかったが、それ以外の項目については従来通りのプログラムが組まれたのである[iv]。

２．公式音楽プログラムがもつ意味

万博の公式音楽プログラムは、その規模と内容からいって、19世紀後半のフランスの音楽界にとって重要な意味をもっていた。そのことは、当時一般に音楽に対してなされていた公的補助の割合とその額を考えてみると容易に理解できる[v]。

第三共和制下の音楽予算について論じたシメーヌによれば、「公教育・宗教・芸術省（以下、芸術省と表記）」の芸術関係予算の中で音楽が占めていた割合は、1890年に20パーセント、1900年には19パーセントであり、建築や美術と比較して、音楽は低い位置に置かれていた。その予算は大きく３つの分野に分かれ、最大のものはオペラ劇場に対する助成、ついで音楽教育、そしてコンセール・ポピュレールの助成だった。1900年には、オペラ劇場助成には112万５千フラン、音楽教育には45万4200フラン、そして、コンセール・ポピュレールには６万フランの予算が割り当てられていた。このうち、コンセール・ポピュレールに対する助成は第三共和制下に新設された項目で、演奏団体に対して交付される助成金である。この助成金を希望する演奏団体は多かったが、実際に交付される団体はわずかで、しかもさまざまな条件がつけられていた。また、美術に関しては、国家による芸術作品の委嘱や買い上げは多かったが、音楽作品に関してはこうした制度はまったく存在しなかっ

た。作品の委嘱が制度として始まるのは第三共和制末期の1938年のことである。

こうした状況にあって、1900年パリ万博の公式の音楽プログラムに総額30万フランの予算がつけられたことは大きな意味をもっていた。公式音楽プログラムでは、後述するようにオペラの演奏に制限があったため、オペラ以外の作品が演奏されることが多かったが、そうした作品の演奏に対する通常の国家による助成は微々たるものだったからである。30万フランといえば、「コンセール・ポピュレール」に対する助成の実に5年分に当たる。この予算を活用すれば、万博の美術部門で2つの展覧会を開いたのと同様、音楽部門でも、かなり意欲的な試みが可能になるはずだった。

3．公式音楽プログラムの準備状況

ところが、1900年パリ万博においては、音楽に関連の公的な委員会が組織されたのは非常に遅かった。音楽イベントを統括する委員会の設置が担当大臣たちによって認められ、省令が出されたのは1899年の11月24日になってからのことである。万博開幕まですでに半年を切っていた。例えば、前回の1889年万博の際には、音楽に関する最初の制令が出され演奏委員会が組織されたのは1887年10月のことだったが、それと比較しても、1年以上遅かったことになる。なぜ、このような遅れが生じたのだろうか。

そもそも、1897年4月、作曲家レオン・ガスティネル Léon Gastinel が率いる音楽家グループは万博組織委員長ピカールに会見を申し込み、1900年万博時に、フランス音楽にひとつのコンサートホールを割り当ててほしいという要望を伝えた[vi]。これは、今回の万博では、音楽に関する公式イベントについてほとんど考慮されていないことを見越しての要望だった。ガスティネルは1867年の万博時、すでに組織委員会に加わっていた人物であり、1900年万博でも「オルフェオン等委員会」に加わった[vii]。しかし、彼らの要望は取り上げられず、危機感を抱いたガスティネルは1898年8月2日、ピカールに対して『ル・タン』紙上で公開状を発表し、芸術の他の分野に比較して、音楽が軽んじられていることを訴えた。ピカールはこの時点で態度を急に軟化させ、翌々日の『ル・タン』紙に掲載された返書の中で、1900年万博で「大フェスティヴァル」を開催することを提案し、さらに音楽部門のプログラムの管轄を芸術省に移した。こうして、ようやく準備が本格的に始まったのである。

1899年11月24日の省令では、1900年の万博において、音楽は「作曲」と「演奏」の2つの観点から展示されること、また、「コンサート委員会」と「吹奏楽・金管合奏、オルフェオン」委員会を設置することが明らかにされた[viii]。「コンサート委員会」では、オーケストラ、室内楽、オルガンの3種類のコンサートが企画され、「吹奏楽・金管合奏、オルフェ

オン」の委員会ではコンクールやフェスティヴァルが企画された。当時オルフェオンをはじめとするアマチュア合唱・合奏活動はすでに下火になっていたが、従来通り、万博の企画に組み入れられた。

4．オーケストラの公式コンサート

オーケストラの公式コンサートは合わせて10回、5000席を有するトロカデロ宮の大ホールで開かれた[ix]。うち3回（6月28日、8月9日、9月20日）はオーケストラと独唱または独奏、残りの7回（5月31日、6月14日、7月12日、7月26日、8月23日、9月6日、10月4日）はより大規模で、オーケストラと独唱、合唱が用いられた。

編成はオーケストラと合唱合わせて250名に達し、オーケストラはエキストラで増強されたパリ音楽院演奏協会のオーケストラが担当した。指揮はタファネル P. Taffanel（オペラ座管弦楽団・パリ音楽院演奏協会の指揮者、フルート奏者)、合唱指揮はルソー S. Rousseau が受け持った。

チケットの値段は2フラン、1フラン、0.5フランという3種類に分かれ、さらに、25パーセント割引もあった。この値段は同時期の演奏団体のチケットと比べても安価であり、あらゆる階層にオーケストラのコンサートを開いたという点で『ギド・ミュジカル』の批評家は組織委員会を称賛した[x]。オーケストラ・コンサートの平均入場者は3,670人。まずまずの入りで、以下の通り、全体として、約5000フランの黒字が出た。

●10回のオーケストラ・コンサートの収支

入場料		11,678フラン15
支出	オルガン使用	1,000フラン
	会場警備など	5,700フラン
	差し引き	＋4,978フラン15

公式報告書によれば、省令により、10回のコンサートでは、フランスの作曲家の作品またはその抜粋だけが演奏されることが決められ、その曲目の選定はコンサート委員会で行なわれた。ひとりの作曲家につき1作品という原則があり、また、物故者よりも現存する作曲家をより多くプログラムに入れることが望ましいとされていた。さらに、劇音楽については、未発表のオペラの抜粋か、現在のレパートリーに入っていないオペラの抜粋に限るという条項がつけられていた[xi]。これは、1867年万博以来、伝統的に守られてきた条項である。パリのオペラ劇場と競合しないための措置だったのであろう。

コンサート委員会の報告者だった作曲家ブリュノー A. Bruneau が芸術省大臣に宛てる

形式で書いた報告書によれば、コンサート委員会がこのオーケストラのプログラム編成の際に意図したことは、フランス音楽史を概観することだったという[xii]。その概観を提示するため、委員会は4世紀にわたる60作品を選んだが、代表作として選んだ曲目は時代順には並べられなかった。この点について、公式報告書は次のように理由を説明している。「単調さを避け、常に聴衆に彼らの芸術的な趣味にふさわしい作品を提供するために、委員会はひとつのプログラムの中で異なった時代や異なった流派を組み合わせるように気をつけた。また、委員会は物故作曲家については、その作品が音楽芸術の重要な発展段階を示しているものを選ぶように留意した」[xiii]。つまり、フランス音楽史を歴史的に時間軸に沿って概観するよりも、聴衆を退屈させないことを優先させたわけである。

こうしてコンサートで取り上げられた60作品の内訳は、公式報告書によれば、「昔の」作曲家10作品、同時代の物故作曲家13作品、現存する作曲家37作品だった。では、フランス音楽史の概観を示すために委員会が選定した60作品とは実際にどんなものだったのか、また、プログラムの組み立てはどのようになっていたのか、10回のコンサートで演奏された曲目を見てみよう。なお、作曲家の名前の後につけたa, b, cの記号は、それぞれ、公式報告書で分類された「昔の作曲家[a]」「同時代の物故作曲家[b]」「現存する作曲家[c]」に当たる。

1900年パリ万博フランス音楽公式オーケストラ・コンサート　プログラム一覧[xiv]

1．1900年5月31日

サン＝サーンス[c]：カンタータ〈天空の灯火〉

ジャヌカン[a]：〈鳥の歌〉(無伴奏四部合唱)

リュリ[a]：〈アルチェステ〉からアリアと「地獄の場面」

ラモー[a]：モテット〈クアム・ディレクタ〉

グレトリ[a]：アリエット〈シルヴァニ〉

グルック[a]：〈アルチェステ〉から「宗教的な場面」

グノー[b]：〈ユリシーズ〉から抜粋

ベルリオーズ[b]：〈ロメオとジュリエット〉から「キャピュレット家の宴会」

2．1900年6月14日　共和国大統領ルベ臨席

エロール[b]：〈プレ・オ・クレール〉序曲

ピエルネ[c]：合唱付きの交響詩〈紀元千年〉から抜粋

マスネ[c]：〈荘厳行進曲〉

デュボワ[c]：〈クロヴィスの洗礼〉

ビゼー[b]：〈アルルの女第1組曲〉

スポンティーニ[a]：〈ヴェスタル〉第2幕フィナーレ

3．1900年6月28日

オベール[b]：〈レストック〉序曲

ブリュノー[c]：〈メシドール〉（「黄金のカテドラル」の交響的絵画）

レイエール[c]：〈エロストラート〉から序奏と第2幕のアリア

ヴィダル P. Vidal[c]：バレエ〈ビュルゴンド〉抜粋

マレシャル H. Maréchal[c]：交響的絵画〈アンタール〉抜粋

ラロ[b]：〈スペイン交響曲〉（サラサーテによるヴァイオリン独奏）

（アンコール…バッハ：〈ソナタ第6番〉から「前奏曲」ホ調）

4．1900年7月12日

ヴィドール[c]：〈交響曲第3番〉（ヴィエルヌによるオルガン独奏）

ルヌヴー[c]：〈ジャンヌ・ダルク〉第3部抜粋

ジョンシエール[c]：〈ディミトリ〉序曲

フォーレ[c]：〈レクイエム〉

シャブリエ[b]：〈スペイン〉（管弦楽のためのラプソディー）

5．1900年7月26日

トマ[b]：〈フランソワーズ・ド・リミニ〉からプロローグ

S．ルソー[c]：〈メロヴィック〉から第2幕抜粋

ランベール L. Lambert[c]：モロッコ風狂詩曲〈タンジェ、夜〉

ダンディ[c]：〈鐘の歌〉から第5景

ギロー[b]：〈謝肉祭〉

6．1900年8月9日

ギルマン[c]：オルガンと管弦楽のための〈交響曲〉作品42

デュヴェルノワ A. Duvernoy[c]：〈嵐〉からレシ、デュオ、トリオ

イルマシェール P. Hillmacher[c]：管弦楽組曲〈クローディ〉

メユール[a]：〈ストラートニス〉からアリア

ロパルツ[c]：〈ブルターニュのコラールによる交響曲〉からフィナーレ

ドリーブ[b]：〈コッペリア〉からバラードとスラヴ主題と変奏

7．1900年8月23日

ボイエルデュー[a]：〈隣村の祭り〉序曲

マルティ G. Marty[c]：〈メルラン・アンシャンテ〉抜粋

メサジェ[c]：〈二羽のハト〉から「エール・ド・ダンス」

パラディール E. Paladilhe　[c]：〈海の聖マリ〉」(プロヴァンス伝説、第4部)

ジグー E. Gigout[c]：ヴァイオリンとオーケストラのための〈瞑想〉

ドビュッシー[c]：〈選ばれた乙女〉

オルメス A. Holmès[c]：交響詩〈アイルランド〉

8．1900年9月6日

ブルゴー＝デュクドレー[c]：〈タマラ〉（第2幕抜粋）

ユー G. Hue[c]：〈眠れる森の美女〉

ルルー X. Leroux[c]：〈ヴェニュスとアドニス〉（セーヌ・リリック）

デュカ[c]：〈魔法使いの弟子〉

ケルビーニ[a]：〈レクイエム〉から「アニュス」と「サンクトゥス」

9．1900年9月20日

コカール A. Coquard[c]：〈エステル〉序曲

ゴダール[b]：〈タッス〉から二重唱

G. シャルパンティエ[c]：〈イタリアの印象〉（管弦楽組曲）

デュパルク[c]：〈旅への誘い〉〈フィディレ〉

ショーソン[b]：交響詩〈ヴィヴィアーヌ〉

ヴォルムゼル A. Wormser[c]：交響的挿話〈レ・ミゼラブル〉

10．1900年10月4日

ピュニョ R. Pugno[c]：ピアノと管弦楽のための〈コンチェルトシュトック〉

エルランジェ C. Erlanger[c]：〈ケルマリア〉（管弦楽組曲）

ピュジェ P. Puget[c]：〈空騒ぎ〉前奏曲

ルフェーブル Ch. Lefebvure[c]：歌と管弦楽のための〈幻の女神〉

ダヴィッド[b]：〈エルキュラヌム〉から「レシ」、「幻影」、「バッカナル」

フランク[c]：〈至福〉から「前奏曲第8番」

公式報告書は、万博のオーケストラの公式コンサート・シリーズについて大成功だったと自画自賛しているのに対し、当時のメディアの批評を読むと、委員会によって作成されたプログラムにロジックと一貫性が欠如していること、委員会の意図に反してフランス音楽の発展についてほとんど見取り図を示していないこと、さらに、フランスの作曲家の交響曲が入っていないなどの批判が目につく[xv]。確かにこのプログラムを見る限り、その批判は当を得たものだったといえよう。コンサートで取り上げられた60人の作曲家の中で、話題になった作曲家はサン＝サーンスとフォーレとドビュッシーだった。特に、フォーレとドビュッシーの真価が広く認められた点は注目される。

●サン＝サーンスの新作カンタータ〈天空の灯火〉

幕開けコンサートを飾ったサン＝サーンスの、ソプラノ、独唱、オーケストラ、オルガン、語り手のための新作カンタータ〈天空の灯火〉は、公式コンサートの目玉となるはずの作品で、電気を讃美したアルマン・シルヴェストル Armand Silvestre の歌詞に音楽をつけたものである。

パリが電気で照明されるようになったのは、1844年のコンコルド広場のアーク灯が最初だったが、普及するようになったのは1877年以降のこと。特に、電気を家庭用に供給するシステムが19世紀末にできてから、電気は家庭に一挙に入り込み、電灯は時代の最先端をいく、明るく、清潔で、経済的なあかりとしてもてはやされた[xvi]。

万博は夜のパリを電気の力で夢の世界へと一変させた。すでに、1889年、噴水のイルミネーションによる夜間ショーが行なわれ、エッフェル塔の上に設置されたスポットライトは空を照らし出した。しかし、1900年の万博では、電気照明はさらに大規模に使用され、祭りは夜まで開かれた。特殊な照明効果も使われ、電気館の正面は光のステンドグラスの窓となり、さまざまな輝きが集められたように見えた。しかし、サン＝サーンスのカンタータは、手慣れた書法が一応の評価を得たものの、その後のレパートリーに残ることはなかった。

●フォーレの〈レクイエム〉

万博コンサートではフォーレの〈レクイエム〉が取り上げられたが、その演奏はフル・オーケストラ版による初演となった。それまでに使用されていた楽譜は小規模編成版だっ

たが、巨大なトロカデロ宮での演奏を念頭に置いて改変が行われたのであろう。コンサートの直後にスコアが出版されたが、この「劇場的」に化粧されたスコアが最近まで一般的に使われていた版である。

このときのコンサートでは、ソプラノ歌手が歌った「ピエ・イエズ」がアンコールされたが、バス声部を歌った歌手は完全なオペラ歌手であり、作品の中での自分の役割を理解していないと、作曲者フォーレは不満だった[xvii]。しかし、フォーレの〈レクイエム〉は、万博の公式コンサートの中でも特に称賛され、フォーレの名声を高めた。

●ドビュッシーの登場

この万博の公式コンサートで、前衛作曲家ドビュッシーの作品が、オーケストラ部門と室内楽部門の双方でプログラムに入れられたことは注目に値する。カンタータ〈選ばれた乙女〉(1893初演)、〈弦楽四重奏曲ト短調作品10〉(1893初演)、さらに〈ビリティスの歌〉(1900初演)である。

保守的な委員会の選曲としては珍しい結果だったが、後述するように、ドビュッシーの作品はいずれも「補欠当選」でプログラムに入れられたものであり、しかも彼の作品を入れるに当たっては、激論が戦わされた[xviii]。当時ドビュッシーは〈牧神の午後への前奏曲〉(1894初演)などの作品で若手作曲家として頭角を現しつつあったが、〈ペレアスとメリザンド〉の初演前であり、まだ、その名声は確立されていなかった。

ドビュッシー作品に対して会場の反応は概して良かったが、音楽評論家の間では評価は二分された。その中で、批評家のエドゥアール・ラロ(作曲家ピエール・ラロの息子)は『ル・タン』紙上で「古今の音楽家の中で、これほど魅力的で柔軟で繊細なメロディーの才能のあるものはいない。特にこれほど独創的で洗練され、繊細な和声家はいない。」と絶賛。これに感激したドビュッシーはラロに礼状を出したことが知られている[xix]。

万博会場で演奏されたドビュッシーの作品中、カンタータ〈選ばれた乙女〉は今日、演奏される機会が少ない。しかし、カンタータというジャンルは当時の彼らにとってはごく身近な存在であり、また、万博のコンサートのような祝祭的な場や巨大な演奏空間には適したジャンルだったことは重要である。この後のドビュッシーの活躍は、万博コンサートで一般的に認知されたことが大きく作用したと考えられる。この年の暮れ、ドビュッシーはラムルー管弦楽団の演奏会で〈雲〉と〈祭り〉を初演することになる。

5．曲目選定の裏側――ブリュノーの報告書とX氏の批判

多額の費用を投じて開催された万博のオーケストラの公式コンサート・シリーズである

が、フランス音楽史を俯瞰する目的だったにも関わらず、その意図がほとんど果たされなかったことは、プログラムの構成から容易に理解できる。ピエール・ラロが「方法論がなく、ごった煮的だ」と痛烈に批判しているように[xx]、そこにはいかなる理念も感じられない。なぜプログラム構成が失敗してしまったのだろうか。

時間がなかったことは確かである。前述したように、1900年パリ万博では、コンサート委員会が組織されたのは開会式まで半年を切った時点であった。しかし、その時間が少ない中で、どのようなプロセスでプログラムが決められたのだろうか。

曲目を選定したコンサート委員会は次のようなメンバー構成であり、官僚と作曲家を主体にした委員会であった[xxi]。音楽学者や音楽批評家等がまったく含まれていないのが特徴的である。

●1900年パリ万博コンサート委員会構成メンバー

芸術局長	1
芸術局の官僚	2
パリ音楽院院長	1
芸術アカデミー会員	5
パリ音楽院教授	5
パリ音楽院演奏協会指揮者	1
パリ音楽院前事務長	1
音楽教育視学官	2
作曲家	6
書記	1

この曲目選定をめぐって、興味深い資料が存在する。これは委員会のメンバーが匿名で発表したもので、ブリュノーがまとめた報告書に対する批判である[xxii]。ブリュノーは報告書の中で、パリ万博の公式の音楽プログラムについて述べただけでなく、フランス音楽史の概観を論じ、その中で、今回の公式コンサートで曲目に選ばれた作曲家と作品を織り交ぜるという形で論を進めた。「(委員会の旧メンバー) X...」と署名されたこの匿名記事は『ルヴュー・イストワール・エ・クリティック・ミュジカル』誌に掲載されたもので、ブリュノーが報告書の中で述べているフランス音楽史に関する数々の誤りを指摘し、認識の不足を批判しているが、同時に、プログラムの曲目選定がどのようにして行なわれたのかを委員会の議事録を参照しながら明らかにしている。ちなみにフルシャーはこの著者をヴァンサン・ダンディではないかと推測している[xxiii]。

短期間で公式の音楽イベントのプログラムを作成することになった委員会の作業が、突貫工事になったことは容易に想像がつくが、この反論記事には、多額の費用を要する公式コンサートの曲目がどのような手順で決められていったのか、そして、その大きな問題点などが明らかにされている。以下、その記事をもとに、曲目選定の過程を見ていきたい。

12月４日、公教育・芸術省大臣ジョルジュ・レーグ Georges Leygues は第１回の委員会を召集し、1900年万博では「フランス音楽をその紀元から現在まで」「展示」するように要請した。そのとき召集された21人の作曲家の中から、互選で投票が行なわれ、委員長にサン＝サーンス、副委員長にデュボワとマスネ、報告者にブリュノーが選ばれ、さらに書記にはＪ．ビゼーが決定した。そして、作曲家側からはレイエール、パラディール、ルヌヴー、ブルゴー＝デュクドレー、フォーレ、ジグー、ギルマン、ダンディ、ジョンシエール、マルティ A. Marty、ピエルネ、ピュニョ、レティ Rêty、S. ルソー、タファネル、ヴィダル、ヴィドール、官僚としては、芸術局長ルジョン H. Roujon、劇場局局長デシャペル、助成劇場担当政府コミッショナー、ベルンナイム Bernheimというメンバーによって、公式コンサートのプログラムが決定されたのである。

「フランス音楽の歴史」を展示するための、10回の大規模なオーケストラ・コンサートと11回の室内楽コンサートの曲目をごく短期間で決めるために、次のような方法がとられた。１月15日の会合の席上で、テオドール・デュボワが古今の作曲家のリストを委員たちに提示した。各委員はそのリストに付け加えるべき名前があれば、それを指摘することができた。こうして作られた作曲家リストの中から、プログラムに入れる作曲家を投票で選んだのである。

その結果は以下の通りだった。

14票　ラモー、ベルリオーズ、ドリーブ、ラロ、ビゼー、ルフェーブル、メサジェ

13票　グルック、トマ、ダヴィッド、グノー、イルマシェール

12票　ジャヌカン、リュリ、ルルー

11票　フランク、ギロー、ゴダール、シャブリエ、シャルパンティエ

10票　エルランジェ、デュパルク

９票　グレトリ、エロール、ヴォルムゼル、ユー

８票　オベール、コカール、オルメス、デュヴェルノワ

７票　ボイエルデュー、マレシャル、ピュジェ、ランベール

６票　ショーソン

５票　シャピュイ、ドビュッシー

3票　ルシュウール、ルベール、ボエルマン

2票　グヴィ、ド・ラ・ニュクス de la Nux

1票　ロパルツ、サルヴェール Salvayre, ペサール Pessard

なお、委員会のメンバーの名前はこのリストには入っていない。彼らの作品は当然のこととして曲目に入れられることになっていた。この会合で投票したメンバーは14人だけで、欠席者は11人（サン＝サーンス、マルティ、ピエルネ、ダンディ、マスネ、フォーレ、ヴィダル、レイエール、レティ、ヴィドール）に上った。

投票の結果、票数の過半数を上回る8票以上を獲得した作曲家がまず選ばれ、その作品を組み合わせて、公式コンサートのプログラムを作成する作業が始められた。

その後、1月25日の委員会で、ダンディは交響楽のコンサートのプログラムにロパルツ、マニャール、デュカ、ラボーの名前がないことを嘆いた。およそ2ヶ月後、3月30日の委員会の際、第7、第8、第9コンサートのいくつかの曲目がまだ決まっていなかったことから、追加の投票が行なわれ、その結果、デュカ（13票中10票）、ドビュッシー（8票）、ショーソン（7票）が選ばれ、さらに、フォーレとダンディの発案によって、ロパルツが（8票）、ルジョンの発案によってスポンティーニが（挙手で）最終的に認められた。

こうして、ようやく、コンサートで取り上げる作曲者が決定したわけである。しかし、時代もジャンルもまったく関係なく、コンセプトもはっきりしないまま、票数だけでフランス音楽史を代表する作品を選ぶことに無理があったのは当然だった。

6．室内楽コンサート

一方、「X... 氏」の報告によれば、室内楽の公式コンサートの曲目選定に関しても同様に投票という手段がとられ、1900年1月18日の委員会で投票が行なわれた。公式報告書では、このコンサート・シリーズは「一時期顧みられず、その後輝きを取り戻した、もっとも高貴なジャンルの発展に標柱を立てた」と記されているが[xxiv]、曲目選定の内容はオーケストラ・コンサートのときと変わりなかった。また、室内楽コンサートについては、芸術省側は当初、招待者のみを入れるコンサートにする計画を提示したが、それに対して、委員会は全会一致で反対した。招待された人が来るとは限らないこと、そして熱心なアマチュアがその措置に立腹するだろうという理由によるものだった。

「X... 氏」の報告書によれば、当初全12回が予定されたのコンサートのために、60人の「サンフォニスト」の名前を挙げる必要があった。1回のコンサートにつき、5人の作品を取り上げる勘定だった。そのうち、委員会のメンバーの作曲家で19の枠が埋まり、さ

らに10席はまだ演奏されていない作品に当てられた。これは、1878年の万博を思い起こさせる措置である。その結果、残りの31名の作曲家を選ぶ必要があった。

ところが、この委員会に出席した委員は、オーケストラのコンサートの曲目を選定した際よりもさらに少なく、12人しかいなかった。サン＝サーンス、ルヌヴー、ブルゴー＝デュクドレー、マルティ、タファネル、マスネ、ジョンシエール、レティ、レイエール、ダンディ、ヴィドールが欠席したのである。

この12人が投票した結果が以下の通りである。

12票　ラモー、ルフェーブル、フランク

11票　クープラン、ド・カスティヨン、ボエルマン、ポール・ラコンブ、シャピュイ、マレシャル Maréchal、ピュジェ、ランベール Lambert

10票　ベルナール Bernard

9票　ショーソン、ダリエ Dallier、シュヴィヤール、ヴェッケルラン

8票　ルベール、ロパルツ、デュカ

7票　ジェダルジュ、デュパルク

6票　ルクレール、シャブリエ、デュヴェルノワ、ドビュッシー、ジョルジュ A. Georges

5票　ド・グランヴァル、プフェフェール G. Pfeiffer, ド・ブレヴィル de Breville

4票　シャルパンティエ、ペリルー Perilhou, ディエメル、ド・ボワデフル de Boisdeffre, アラリー Alary, L. ラコンブ、ゴセック

3票　ライヒャ、メサジェ

2票　ケルビーニ、グレトリ、グノー、ヴィルンスベルジェ Wiernsberger, ド・ラ・トンベル de la Tombelle, カエン A. Cahen

1票　オンスロー、ヴィエルヌ、ユー, ティエルソ Tiersot

デュボワの提案により、過半数の7票以上の作曲家に加えて、ビゼー、ドリーブ、グノー、ニデルメイエールが選定された。さらに、6票の作曲家について再度投票し、その結果は以下のようになった。(上のリストで6票を得た作曲家の中にはシャミナードが入っていないが、その点についての説明は書かれていない。)

ルクレール、ジョルジュ	10票
ドビュッシー	9票
シャミナード	2票

シャブリエ、デュヴェルノワ　1票

このようにして、短期間のうちに、公式プログラムで取り上げる作曲家のリストが作られ、その後も委員会は頻繁に召集された。当時パリ音楽院作曲科教授だったフォーレは、〈プロメテ〉を作曲中だったが、委員会のメンバーにも加わっていたため、「パリ音楽院の試験が丸々10日間ある上に、万博のための非常に馬鹿げた余分な委員会がいろいろある」と1900年2月5日付けの手紙に書いている[xxv]。このような安直な方法で「フランス音楽史の起源から現在まで」が展示できるはずがなかったが、ともあれ、こうして、6月8日から10月12日まで、11回にわたって行なわれた室内楽コンサートのプログラムが決定され、66作品が演奏されることになった。ちなみに室内楽コンサートには、器楽と声楽の両方が含まれていた。

会場の小ホールは音響効果が悪く、遮音も悪く、集まったのは少数の熱心な聴衆だけだった。公式報告書には、平均入場者数216人、入場料　一律1フラン（25パーセント割引あり）、収支は赤字241,53フランという数字しか出ていないが、「X...」氏の記事には、各回ごとの収支決算が提示されているので、室内楽コンサートの各回の収支と各回のプログラムの内容を掲げておく[xxvi]。

●1900年パリ万博公式室内楽コンサートの収支

	日　付	収入(フラン)	支出(フラン)	収支(フラン)	
1	1900. 6. 8	153.75	158.50		-4.75
2	6.22	178.25	160.70	+17.55	
3	7.6	131.50	156.45		-24.95
4	7.20	31.00	147.10		-116.10
5	8.3	65.00	150.15		-85.15
6	8.17	140.50	157.25		-16.75
7	8.31	118.25	154.68		-36.43
8	9.14	165.00	159.15	+5.85	
9	9.28	164.00	159.41	+4.59	
10	10.5	175.50	158.25	+17.25	
11	10.12	155.25	158.25		-3.00
	合　計	1478.00	1719.89	45.24	-287.13
					-241.89

1900年パリ万博公式室内楽コンサート曲目一覧[xxvii]

1．1900年6月8日、パランParent四重奏団（ピアニストと声楽家が協力）

1）フランク：〈ピアノ五重奏曲〉

2）デュパルク：〈嘆き〉〈波と鐘〉

3）ビゼー：ピアノのための〈半音階的変奏曲〉

4）ルベール：〈ピアノ三重奏曲〉

5）ピエルネ：〈ヤンティス〉から四重唱

2．1900年6月22日、アヨHayot四重奏団（ピアニストと声楽家が協力）

1）ドビュッシー：〈弦楽四重奏曲〉

2）ブルゴー＝デュクドレー：ヴァイオリンのための〈3つの小品〉

3）ピュニョ：〈ピアノソナタニ短調〉

4）ブリュノー：2つの〈フランスのリート〉

5）ブリュノー：〈幸せな浮浪者〉

6）マルティ：〈3つのメロディー〉

3．1900年7月6日　ナドーNadaud四重奏団（ピアニストと声楽家が協力）

1）ヴィドール：〈ピアノ五重奏曲〉作品68

2）S.ルソー：〈ガヴォット〉

3）ルクレール：ソナタ〈トンボー〉

4）ニデルメイエール：ロマンス〈湖〉

5）レイエール：メロディー〈忘却の河〉

6）S.ルソー：メロディー〈夢の花〉〈夏〉

4．1900年7月20日　演奏者不明

1）サヴァールSavard：弦楽四重奏曲

2）ボエルマン：〈チェロソナタ〉

3）ドビュッシー：〈3つのビリティスの歌〉

4）ジョンシエール：〈ヴァイオリン協奏曲ニ短調〉（四重奏2組による伴奏）

5）ジョンシエール：〈2つのメロディー〉

5．1900年8月3日、パラン他

1）ルクレール：ヴァイオリンとヴィオラのための〈ソナタ〉

2）ギルマン：〈無言歌〉

3）ヴィダル：〈2つのメロディー〉

4）ヴィダル：〈クリスマス、または降誕の神秘〉

5）A.シャピュイ：ヴァイオリンとピアノのための〈変奏曲〉

6）G.デュボワ：メロディー〈マドリガル〉〈近寄らないで〉

7）Th.デュボワ：〈カノン形式の2つの小品〉

8）Th.デュボワ：〈ヴァイオリンソナタ〉

6．1900年8月17日、ナドー四重奏団（ピアニストと声楽家が協力）

1）カスティヨン：〈ピアノ四重奏曲〉作品7

2）ピュジェ：〈3つのメロディー〉

3）グノー：〈2つのメロディー〉

4）ロパルツ：2台ピアノのための〈小品〉ロ短調

5）ロパルツ：〈4つの詩〉

6）ジェダルジュ：〈ヴァイオリンソナタ第2番〉作品19

7．1900年8月31日、エヨ四重奏団（ピアニストと声楽家が協力）

1）ランベール：〈ピアノ五重奏曲〉からアダージオとフィナーレ

2）ラコンブ：〈チェロソナタ〉

3）マレシャル：チェロのための〈2つの小品〉

4）ジョルジュ：〈ミアルカ〉からシャンソンの抜粋

8．1900年9月14日、管楽器協会のメンバーによる演奏

1）グヴィ：〈管楽八重奏曲〉（フルート、オーボエ、2クラリネット、2ホルン、2ファゴットのための）

2）ピエルネ：〈パストラル・ヴァリエ〉

3）ルフェーブル：〈組曲〉（フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットのための）

4）ベルナール：〈ディヴェルティスマン〉

5）ブルゴー＝デュクドレー：〈カバ〉

9．1900年９月28日、パラン四重奏団ほか

1）ラロ：〈（ピアノ）三重奏曲イ調〉（作品26？）

2）ダンディ：〈弦楽四重奏曲第２番〉作品43

3）ゴダール：２つのヴァイオリンのための〈真夜中〉

4）ルフェーブル：三重唱曲〈木々の息吹〉

5）イルマシェール兄弟::〈２つのメロディー〉

10. 1900年10月５日、ナドー四重奏団ほか（声楽、ピアノ、クラヴサンなど）

1）サン＝サーンス：〈弦楽四重奏曲第１番ホ短調〉作品112

2）フォーレ：メロディー〈秘密〉〈ひめやかに〉

3）ラモー：〈リブリ〉〈無遠慮〉〈内気〉〈タンブラン〉

4）ルヌヴー：〈ノクチュルヌ〉〈四月の悲しみ〉

5）ダンドリュー：〈おしゃべり〉

6）ダカン：〈かっこう〉

7）クープラン：〈目覚し時計〉

8）フォーレ：〈ピアノ四重奏曲第２番ト短調〉作品45

9）サン＝サーンス：〈ポプラの葉〉〈アテネ〉

11. 1900年10月12日　パラン四重奏団とピアニスト、声楽家による

1）ダリエ：〈トリオ〉ハ調

2）ショーソン：ピアノ、独奏ヴァイオリン、弦楽四重奏のための〈協奏曲〉

3）ダリエ：メロディー

4）ドリーブ：メロディー

5）パラディール：メロディー

以上のプログラムから、フランス・バロック期の作曲家５人（ダンドリュー、クープラン、ダカン、ラモー、ルクレール）を除いて、残りは19世紀以降に生まれた作曲家で、特に同時代の作曲家の比率が高いことが分かる。報告書が謳っているようにフランスの室内楽史をたどったとは到底いえないプログラムであり、当然、室内楽コンサートについても、オーケストラの公式コンサートと同様、プログラミングに批判が集中した[xxviii]。プログラムの選定過程のずさんさがここでも響いたのだった。

7．オルガン・コンサート

1878年パリ万博に際して、カヴァイエ＝コルのオルガンを備えたトロカデロ宮のホールが完成して以来、パリの音楽生活に「世俗のオルガン」という新しいジャンルが加わった。巨大なトロカデロのホールは音響的な問題が多く、普通のコンサートには適さなかったが、唯一、オルガンだけは残響の問題がなかったこともあって、このホールでは19世紀後半定期的にオルガン・コンサートが開かれていた[xxix]。万博のコンサートでも、1878年以来、オルガン・コンサートは公式音楽プログラムの一部として定着していた。1900年パリ万博のオルガン・コンサートは6月5日、19日、7月3日、17日、31日、8月14日、28日、9月11日、25日、10月9日の計10回開かれた。

今回、入場料は一律0.5フランという安価で、25パーセント割引も行なわれたにもかかわらず、平均入場者は1,120人に過ぎなかった。ホールの4分の1も埋まらなかった計算になる。しかもなお、万博前に行われた修理には6000フランがかかった。そして、その修理費を除いてもなお、オルガン・コンサート全体の収支は、以下のように、5,128フラン70サンチームの赤字となった[xxx]。

20年前には大きな反響を集めた万博のオルガン・コンサートであるが、今回はまったく新味がなかった。オルガン・コンサートの場合、プログラムの選定には、フランスの作品に限るという規制はなく、古今東西の作品を自由に組むことができた。その結果、以下に示すように、各回のコンサートでは、オルガン独奏だけでなく、さまざまな楽器が参加して雑多なジャンルの作品が組まれていたが、それでも聴衆をひきつけるには至らなかった。

以下、オルガン・コンサートの総収支と各回のプログラムを掲げておく。

●10回のオルガン・コンサートの収支[xxxi]

入場料総計		1,521フラン30
支出	オルガン使用	1,000
	会場警備など	5,650
	差し引き	−5,128フラン70

1900年パリ万博公式オルガン・コンサートの曲目一覧[xxxii]

1．1900年6月5日　オルガン独奏：マルティ（国立盲学校教授、サン＝フランソワ＝グザビエ教会オルガニスト）

1）ヴィドール：〈交響曲第3番〉からアンダンティーノとユニネット

2）メンデルスゾーン：〈ソナタ第1番〉からアダージオ

3）フランク：〈幻想曲ハ長調〉

4）J.S.バッハ：ヴァイオリンのための〈アリア〉

5）マルティ：〈鐘〉

6）マルティ：〈ブルターニュのノエル〉

7）マルティ：〈カンツォーナ〉

8）マルティ：プロヴァンスのノエル〉からスケルツェッティーノ

2．1900年6月19日　オルガン独奏：トゥルヌミール（サント＝クロティルド教会オルガニスト）

1）J.S.バッハ：〈トッカータとフーガニ短調〉

2）デュボワ：〈フィアット・ルックス〉

3）フランク：〈コラールロ短調〉、〈パストラール〉

4）ヴィドール：〈トッカータ〉

5）ギルマン：〈ソナタ第5番〉

6）ド・ラ・トンベル：〈ベアルヌ狂詩曲〉

7）ヴィエルヌ：〈パストラール〉

8）S.ルソー：〈二重のテーム・ヴァリエ〉

9）ダリエ：〈イン・デオ・カリタス〉

10）トゥルヌミール：〈アダージオ〉と〈スケルツェット〉

3．1900年7月3日、オルガン独奏：エラン J. Haelling（ルーアン大聖堂オルガニスト、サン＝テヴォード・メートリーズ教授）

1）ギルマン：〈ソナタ第5番〉からレシタティーフ、コラール、フーガ

2）J.S.バッハ：〈トッカータ　ヘ調〉

3）ヴィエルヌ：〈交響曲第1番〉からアレグロ・ヴィヴァーチェ

4）クライン Klein：〈瞑想〉

5）サン＝サーンス：〈ブルターニュ狂詩曲〉

6）ヴィドール：〈教皇行進曲〉

7）ディアズ Diaz：〈トゥーレの王の杯〉

8）マッセ Massé：レ・セゾン

9）メユール：〈ジョゼフ〉からデュオ

10）ヴァーグナー：「夢」、〈タンホイザー〉から「祈り」

11）エラン：〈前奏曲〉

4．1900年7月17日　オルガン独奏：ヴィドール（パリ音楽院教授、サン＝シュルピス教会オルガニスト）

1）ヴィドール：〈第5交響曲〉

2）J.S.バッハ：〈幻想曲とフーガ〉　ト短調

3）ヴィドール：〈第10交響曲〉「ローマ風」

5．1900年7月31日　オルガン独奏：ギルマン（パリ音楽院教授、トリニテ教会およびパリ音楽院演奏協会オルガニスト、トロカデロ・オルガン・コンサート創立者）

声楽作品も含むプログラム

1）ギルマン：〈ソナタ第5番〉

2）J.S.バッハ：〈前奏曲とフーガ　変ホ調〉

3）フランク：〈フィナーレ〉変ロ調

4）ショベ Chauvet：〈アンダンティーノ・コン・モート〉

5）ボエリー：〈フーガヘ短調〉

6）サロメ Th. Salome：〈子守歌〉

7）クレランボー：〈前奏曲〉

8）ヘンデル：〈ユダス・マカベウス〉からレシタティーフとエール

9）バッハ：〈Cantate pour tous les temps〉からレシタティーフとデュオ

10）ラモー：〈ダルダニュス〉からレシタティーフとエール

6．1900年8月14日　オルガン独奏：マオー M. A. Mahaut（トロカデロ・フランク・コンサートの創立者）

1）フランク：〈コラールホ長調〉

2）マルティ：〈晩鐘〉〈パストラール〉

3）ルベル Lebel：〈未刊のカンティクムによる変奏曲〉

4）シューマン：〈カノン形式の練習曲〉

5）メンデルスゾーン：〈ソナタ第4番〉からフィナーレ

6）ギルマン：〈葬送行進曲〉〈天使の歌〉

7）ヘンデル：〈メサイヤ〉からエール

8）ピエルネ：〈ヤンティス〉の歌

9）ペリルー：〈馬槽の聖母〉

10) サン＝サーンス：〈鐘〉

11) スナイユ（1687）：〈ソナタト長調〉

12) J. S. バッハ：〈サラバンド、ブレー、メヌエット、ガヴォット〉（ヴァイオリン独奏）

13) J. S. バッハ：オルガン曲集第2巻から〈フーガト長調〉

7．1900年8月28日　オルガン独奏：ジグー（サン＝トーギュスタン教会オルガニスト、博覧会公式コンサートオルガニスト）

1）J. S. バッハ：〈トッカータとフーガニ短調〉

2）メンデルスゾーン：〈ソナタヘ調〉

3）フレスコバルディ：〈エレヴァツィオのためのトッカータ〉

4）ヘンデル：〈ガヴォットト短調〉

5）J. S. バッハ：〈トッカータヘ調〉

6）ボエルマン：〈ゴシック組曲〉

7）サン＝サーンス：〈プレリュードとフーガ変ホ調〉

8）ジグー：〈豊作祈願行進曲〉

9）ジグー：〈トッカータロ短調〉

10) ジグー：〈グラン・ケール・ディアロゲ〉

8．1900年9月11日、オルガン独奏：ヴィエルヌ（ノートル・ダム大聖堂オルガニスト、博覧会祝祭大ホール・オルガニスト）声楽家が協力

1）ヘンデル：〈涙の流れるままに〉

2）J. S. バッハ：〈クリスマス・オラトリオ〉から「子守歌」

3）サン＝サーンス：〈結婚の祝福〉

4）ヴィドール：〈オルガン交響曲第5番〉

5）トゥルヌミール：〈アダージオ〉

6）ギルマン：〈瞑想〉

7）フランク：〈フィナーレ〉

8）ヴィエルヌ：〈交響曲第1番〉から抜粋

9．1900年9月25日、オルガン独奏：デランドル Deslandres（オルガニスト・作曲家、バティニョールのサント＝マリー教会の楽長）、7人の声楽家が協力

1）デランドル：〈勝利の行進曲〉
2）デランドル：〈オフェルトリウムイ調〉
3）デランドル：〈ガヴォット＝ポンパドゥール〉
4）デランドル：〈幻想曲〉
5）ギルマン：〈葬送行進曲〉
6）ギルマン：〈天使の歌〉
7）メンデルスゾーン：〈ソナタ第1番〉からアダージョ
8）デュボワ：〈トッカータ〉
9）レメンス：〈ホザンナ〉
10）ルフェーブル：〈グラン・クール〉
11）デランドル：オペラ・コミック〈マルスとフェービュス〉から抜粋
12）デランドル：〈ハーモニー讃歌〉

10. 1900年10月9日、オルガン独奏：ダリエ（サン＝トゥスターシュ教会オルガニスト）
1）ダリエ：〈イン・デオ・カリタス〉
2）J.S.バッハ：〈パッサカリア〉
3）ジグー：〈トッカータ〉
4）ヴィドール：〈交響曲第8番〉からモデラート・カンタービレ
5）トゥルヌミール：〈アダージオ〉
6）マルティ：〈晩鐘〉
7）S.ルソー：〈悲歌〉と〈子守歌〉
8）サン＝サーンス：〈プレリュードとフーガ〉
9）ギルマン：〈瞑想〉
10）シュトルツ Stolz：〈プレリュード〉
11）デュボワ：〈勝利の幻想曲〉

ここでは詳述する余裕はないが、1900年万博の公式オルガン・コンサートのプログラム構成は、1878年パリ万博と比べても、89年パリ万博と比べても、はるかに雑多であり、プログラムに明確な意図が見られない。例えば78年博では、公式オルガン・コンサートには外国のオルガニストも参加し、お国ぶりを披露したが、1900年万博ではプログラムに新しい工夫はなく、小曲が多く組まれていることが特徴である。これは聴衆を退屈させないための措置であったと考えられる。

8．オルフェオン、金管合奏、吹奏楽のフェスティヴァルとコンサート

オルフェオン、金管合奏、吹奏楽のフェスティヴァルとコンサートは1867年以来、パリ万博には欠かせない伝統的なジャンルだった。フランスでは19世紀後半、アマチュア音楽運動が民衆の間で非常にさかんになり、その数は20世紀初めにフランス全土で1000団体に達した。しかし、芸術的な水準は概して凡庸で、19世紀後半になるほど、「芸術音楽」との距離は開いていった[xxxiii]。

1900年パリ万博では、外国からウィーン・ジングアカデミーをはじめ、多くのアマチュアのすぐれた合唱団体が訪れコンサートを開いたが、フランスのオルフェオンと比較して論じた音楽批評はまったく見当たらない。両者は完全に異なるジャンルとしてみなされていた。

今回の万博でも、オルフェオン、金管合奏、吹奏楽のフェスティヴァルとコンサートは完全に前例に従って組織された。この委員会の構成メンバーを掲げておく[xxxiv]。

●オルフェオン等フェスティヴァルとコンサート委員会構成メンバー

芸術局官僚	1
パリ音楽院教授	1
音楽教育視学官	2
ギャルド・レピュブリケーヌ指揮者	1
ギャルド・レピュブリケーヌ元指揮者	1
作曲家	12
書記	1

コンサート委員会と比較してみると、この委員会にはパリ音楽院の教授が1名だけしか加わっていないこと、また、芸術アカデミーのメンバーがまったく含まれていないことが分かる。すなわち、「芸術音楽」とオルフェオン等の音楽が重なる要素が少なかったことがよく表れている。実際のメンバーは以下の通りだった。

J. ビゼー（書記）、ボルド、カエン、カノビー Canoby、シャピュイ Chapuis(報告者)、コカール、ガスティネル、ジョナス Jonas、ルフェーブル、ルルー、マレシャル、マルモンテル Marmontel、パレス Pares、ペサール Pessard、ヴェッケルラン Weckerlin、ヴェトジュ Wetge(副委員長)、ヴォルムゼル、ウディノ Oudinot、ロラン・ド・リル Laurent de Rille（委員長・歌唱視学長官）

こうして、さまざまなイベントが行なわれたが、内容的には毎年のフェスティヴァルや

コンクールと大差がなく、万博ならではの試みはほとんど見られなかった。この部門全体での支出は21,136フラン20サンチーム。入場料は1フランと0.5フランに設定され、平均入場者数は1,787人という結果になった[xxxv]。5000人収容のホールの約4分の1しか埋まらなかったことになる。

●オルフェオンのコンクールとフェスティヴァル

オルフェオンのフェスティヴァルは1900年7月22日開催された。ダンベの指揮により、百貨店「ボン・マルシェ」の合奏団が協力して、総計1800人以上の参加者が集まった。翌23日、フランスの17団体が参加してコンクールが開催され、優秀部門ではヴァランシエンヌの団体 Les orphéoniste valenciennois が、上級部門ではポーの団体 La Lyre Daloise が受賞した。

それに先立ち、1900年6月10日にはマチネ・ミュジカルが開かれ、委員会委員長リルの指揮により、ソーとサン＝ドニ地区の学校から参加した900人の児童が演奏した。7月8日には、パリ市オルフェオン（3500人の大人と子供、男女、A. シャピュイ指揮）によるマチネーが開かれた。

●金管合奏、吹奏楽のコンクールとフェスティヴァル

金管合奏と吹奏楽に関しては、1900年8月15日、まず国際フェスティヴァルがパレス（ギャルド・レピュブリケーヌ指揮者）の指揮によって行なわれ、翌16日、フランスの5団体が参加してコンクール、さらに、17日と19日にもフェスティヴァルが行なわれた。

また、7月には2度にわたり、軍楽隊フェスティヴァルが行なわれた。

このように、オルフェオン、金管合奏、吹奏楽に関しても、さまざまなイベントが実施されたが、新しい試みは一切なかった。「X... 氏」はこのセクションの委員会についても、次のように鋭い批判を行なっている。それによれば、この委員会はオーケストラ・コンサートと同様の使命をもっていたはずで、曲目についてもフランス声楽史を展示するような、すべての「時代」を代表する作品を選ぶべきであったというのである。「X...」氏によれば、3万フランの予算がオルフェオンだけに使用できることが分かっていたにもかかわらず、委員長リルはセーヌ県のオルフェオンを使えば安上がりであると提案し、それが採用されたという。委員会内部では、オルフェオンによって「歴史的コンサート」を企画できるという考えはまったく浮かばず、曲目選定に当たって、フランス音楽史という観点はほとんど無視されてしまった。結局、委員会は1889年の規則をひとつひとつ検討し、少々修正を加えるにとどまった。しかも、参加団体の枠を広げることさえ行なった。そして、コンクールやフェスティヴァルの細則の検討に多くの時間を費やし、選曲の理由は示

されなかった、というのが「X...」氏の主張である[xxxvi]。確かに、参加団体の枠については、その水準を維持するため、優秀団体絞り込む必要があるというのが、89年の公式音楽プログラムについての反省点となっていたが、それと逆行する措置であった。

9．会議

1900年のパリ万博では、89年万博にひきつづいて、国際会議が開かれた。「19世紀の総決算」が万博のテーマだったことから、宗教・政治を除く12部門で8万人の参加者を集めてさまざまな学術会議が開かれた[xxxvii]。

●万博音楽国際会議

1900年6月14日から18日にかけて、パレ・デ・コングレで行なわれたもので、デュボワとダンディがかわるがわる座長を務めた。この会議では、17の点がピックアップされ、4つのグループに分けて議論がかわされた。

A．教育　指揮のクラスの創設
　　オルフェオンなどアマチュアの団体を発展させること
　　メートリーズの再編について

B．楽器

C．書法と音楽実践　　記譜法の問題

D．その他　　助成劇場における国家の役割

●音楽史会議

1900年7月23日から31日にかけて、オペラ座図書館で音楽史会議が開かれ、「音楽史」と「音楽美学と実践的な改革」について討議された。委員会のメンバーはサン＝サーンスが名誉委員長、ブルゴー＝デュクドレーが委員長、ティエルソが副委員長、ロマン・ロマンが書記を務めた。また、この会議に付随して、7月28日、ティエルソとシャルル・ボルドが組織した歴史的音楽会が開かれ、作曲家の自筆譜の展覧会も行なわれた。

10．結び

1900年11月初め、パリ万博は閉会式を迎えた。閉会式は〈マルセイエーズ〉で始まり、ビゼーの〈祖国〉が演奏された後、〈20世紀の歌〉がクラルティー M. J. Claretieの演出で歌われた。〈20世紀の歌〉はメユールの音楽に別の歌詞をつけたもので、歌詞はアカデミー・フランセーズ会員ド・ボルニエ M. de Bornierの手になるものだった[xxxviii]。その後、グレトリの〈獅子親王リシャール〉からの抜粋が演奏された。従って、この閉会式の音楽はフランス音楽で固められ、しかも「祖国」に重点が置かれていたわけだが、〈20世紀の

歌〉が新作ではなく、100年前のメユールの音楽に別の歌詞をつけたという行為がそのまま、万博におけるフランス音楽の公式プログラムの衰退を物語るものだった。おりしも、19世紀を通じて変わらなかったフランス音楽の権力構造にひびが入り、それまで絶対的優位を誇ってきたパリ音楽院に対してスコラ・カントルムが対抗するだけの力をたくわえ、パリの音楽地図は大きく姿を変えようとしていた。その中で、1900年パリ万博の公式音楽のコンサートは、準備不足もあって、なかば失敗に終わり、この万博の共通目的であるフランスの歴史を音楽面から振り返ることはほとんどできなかった。フランス音楽をプロモートするという公式プログラムの意味は1900年パリ万博では失われてしまったのである。

---

[i] 1900年万博のモノグラフとしては、次の修士論文がある。Marie-Pierre Grillet, *La musique à l'Exposition Universelle Internationale de 1900 à Paris*, Maîtrise d'Education Musicale, Université Louis Lumière-Lyon II,1988.

[ii] 井上さつき『パリ万博音楽案内』、音楽之友社、1998年。

[iii] "*l'Exposition Universelle Internationale de 1900 à Paris — Rapport général administratif et technique par A. Picard* (以下*Rapport général*と表記), Pièces annexes, Paris, Imprimerie nationale 1902-1903, p.488, および tome 6,pp.128-145.

[iv] Emile Monod, *L'Exposition universelle de 1889*, Paris, E. Dentu,1890, tome 1, pp.663-664.

[v] 井上さつき「共和国と音楽——フランス第三共和制初期の音楽助成——」、『季刊 エクスムジカ』プレ創刊号、ミュージックスケイプ、2000年、65-75頁。

[vi] Leon Gastinel, *Influence des Expositions Universelles et Internationales sur l'art musical français autrefois, aujourd'hui, demain*, Paris, Imprimerie de la Poste, n. d.

[vii] ガスティネルは1867年の「歴史的コンサート」組織委員会の書記を務めた。

[viii] *Rapport général*, tome 6, p. 129.

[ix] *Rapport général*, tome 6, pp.135-138.

[x] *Le guide musical*, 1900.6.10／17号, p. 479.

[xi] *Rapport général*, tome 6, pp.128-147.

[xii] Alfred Bruneau, *La musique française —Rapport sur la musique en France du XIIIe au XXe siècle. La musique à Paris en 1900 au theatre, au concert, à l'Exposition—*, Paris, Bibliothèque-Charpentier,1901.

[xiii] *ibid.*, p. 135.

[xiv] *Rapport général*と Grilletの論文を基に筆者が作成したもの

[xv] Grillet, *op. cit.*,p.12 sqq.

[xvi] W. シヴェルブシュ『闇をひらく光――19世紀における照明の歴史――』小川さくえ訳、法政大学出版局、1988年、75頁。

[xvii] Gabriel Fauré, *Correspondance, textes réunis, présentés et annotés par Jean-Michel Nectoux*, Paris Flammarion,1980,p. 236.

[xviii] *Le monde musical* ,1900,p. 259.

[xix] François Lesure, *Claude Debussy-Biographie critique-*, Paris, Klincksieck, 1994, pp. 198-99.

[xx] Grillet, *op. cit*, p. 28.

[xxi] *Rapport général*, tome 6, p. 128.

[xxii] X (Ancien membre de la commission), Bruneauの報告書に関する書評、*Revue d'histoire et de critique musicale*, mars 1901, pp.110-119.

[xxiii] Jane F. Fulcher, *French Cultural Politics and Music――From the Dreyfus Affair to the First World War*, Oxford University Press,1999. 著者は万博の公式―コンサートをドレフュス派と反ドレフュス派との抗争という観点からとらえている。

[xxiv] *Rapport général*, tome 6, p. 142.

[xxv] *ibid.*, p. 145.

[xxvi] X.,*op. cit.*,p. 113.

[xxvii] *Rapport général* とGrilletの論文を基に筆者が作成したもの

[xxviii] Grillet, *op. cit*, p.67 sqq.

[xxix] Rollin Smith, "The organ of the Trocadero and Its Players" in *French Organ Music, From the Revolution to Franck and Widor*, NY, University of Rochester Press,1955, pp.275-308.

[xxx] *Rapport général*, tome 6, p. 140.

[xxxi] *id.*

[xxxii] *Rapport général* と Grilletの論文を基に筆者が作成したもの

[xxxiii] Philippe Gumplowicz, *Les travaux d'Orphée : 150 ans de vie musicale amteur en France, Harmonies-Chorales-Fanfares*, Aubier,1987,p. 214.

[xxxiv] *Rapport général*, tome 6, pp.128-129.

[xxxv] *ibid.*, p. 145.

[xxxvi] X.,*op. cit.*, pp.116-119.

[xxxvii] Grillet, *op. cit.*, p.106 sqq.

[xxxviii] Grillet, *op. cit.*, p. 123.　著者は原曲を特定していないが、歌詞から見て、〈出陣の歌〉であろう。